

『忠臣蔵』本蔵考

——その死への行動に就て

四十回生 栗林有加

序

浄瑠璃『仮名手本忠臣蔵』に於て、高師直へ斬りつけたのは塩谷判官だが、塩谷の相役桃井若狭之助もまた、それ以前に師直を討とうと考えていた。加古川本蔵はこの桃井家の家老である。若狭之助に師直を討つとの決意を聞かされた本蔵は、主君に内緒で師直へ賄賂を贈り事無きを得る。二、三段目に描かれる本蔵のこの行動は、お家断絶の危機を救った「忠義忠臣忠孝」と評されている。ところが九段目では、本蔵はわざと悪人として振舞い、大星力弥の手に掛かって果てることとなる。忠義の士と評された本蔵が、何故悪人の振りをするようになったのか。彼が自ら進んで死のうとするのは何故なのか。登場人物の描写に就ては、この浄瑠璃の作者が複数であることも考慮する場合が或は必要であろうが、本稿では全段に一貫した一人物として本蔵を捉えていくことにする。

以下では、『仮名手本忠臣蔵』から看取される本蔵の行動・心情に考察を加えることにより、彼が死に至った理由を探ってみた。全十一段が時の経過に沿って構成されていることを前提として、本蔵が登場する二、三、九段目を軸に考察した。二、三段目から九段目前までは、死を意識するに至るまでの内的変化が本蔵に生じた期間であると考えた。また九段目は、死を決意した彼が、殺される為の行動へ実際に移ろうとする場であると考えた。よって、九段目以前と九段目とに分けて考察することにする。

第一章 九段目以前

二、三段目に於て忠義の士とされる本蔵が九段目では悪役として振舞い、わざと力弥の手に掛かる。この不可解な行動の意図は、手負いとなってからの本蔵自身の告白により初めて周囲の人々に理解されるのであって、それ以前に

は不明である。しかしこの、二・三段目から九段目に至る、場面には表わされていない時の流れの中で、本蔵の内面には、のちに自ら死へ進む行動を実際にとることになるほどの、劇的变化が起きたと考えられる。この間の本蔵に就ては、手負いとなつての彼自身の長い告白（九段目）思へば貴殿の身の上はく推量あれ由良殿（一）より推測可能である。そこで本章では、二・三段目から九段目前までの間に起きた本蔵の内的変化の様子を、彼の長台詞を参考にしつつ、上京前と、上京してから由良之助の本心を見抜くまでの、二つにさらに分けて考察することにする。

第一節 上京前

まず、師直へ賄賂を贈ったことに対する本蔵の考えはどのようなものであろうか。

桃井家は小藩と設定されており、本蔵も自身が贈る賄賂の額に就て、小身の主人には「不相応の金銀衣服台だいの物」と思っていた。また贈賄行為自体に就ても、「心に染まめへつらひ」と考えていたのであるが、何事も「主人を大事と存ずる」つまり主家の安泰を第一と考え、敢て行なつた。この時の本蔵は、賄賂を贈ることを個人的には恥と思いつつ、結果的に主家が救われたことから、行為をそれ自体への後悔はなかった。ところが、塩谷の師直への刃傷事件が発生するに及んで本蔵は、自分の賄賂が、「相手代つて塩谷

殿の。難儀となつた」遠因の一つになってしまったことから、塩谷家への後ろめたさを感じるようになっているのである。

また本蔵は塩谷家に対し、師直へ斬りつけた塩谷を抱き留めたことについても後悔の念を抱いている。それは「相手死なずば切腹にも及ぶまじ」つまり、師直を死に至らしめねば塩谷家は断絶を免れるであろう、との判断からつた行動ではあったが、塩谷は結局切腹、家は断絶した。本蔵は、抱き留めるといふ行為が、塩谷が無念を残す結果を招いてしまった故に、己の咄嗟の判断を誤りであつたと後悔しているのである。

お家の安泰第一の立場からすれば、事無きを得ようとの贈賄行為も、塩谷を抱き留めたことも、充分首肯し得る行動である。けれども、実際の彼は、主家を安泰に導いた贈賄行為自体には後悔をしていないものの、一方では、そのお家第一の行動が塩谷家の災いの遠因となつてしまつたことから、塩谷家に対して後ろめたさや後悔を感じているのである。家を守るべき家老として当然のことをしたはずの本蔵が感じている、この後ろめたさ・後悔は、何に由来して生じたものであろうか。

本蔵のつたお家の安泰第一の行動は、封建官僚組織の一員としての行動である。近世封建社会における、秩序重

視の論理からみた場合に、それが是と見做されるのである。しかし、戦国の世から培われてきた武士のあり方、生き様といったものが、平安な社会秩序を保とうと意図された政治組織の下に必ずしもあてはまるものではない。その様な論理からみると、本蔵の行動は逆に武士らしくらぬ行動として非難されるものとなる。このような、近世の武士に求められた相反する二つの論理は、内山美樹子氏の言を借りれば「封建官僚的論理」と「古武士的論理」の対立²ということになる。本蔵が塩谷家に対して感じている後ろめたさや後悔は、それまで封建官僚的論理に沿った生き方をしてきた彼の内部で、塩谷の刃傷事件をきっかけとして、もともと内在していた二つの論理——封建官僚的論理と古武士的論理——の間に相克が起きたことの顕れだといえる。これまで、贈賄行為と塩谷を抱き留めたことに対する本蔵の心情をみてきたが、次に、娘小浪に対する彼の気持をみてみよう。

小浪と、由良之助の息力弥は、以前からの許婚であったが、由良之助の主君塩谷の刃傷・切腹・家の断絶以後、両家は疎遠になっていた。しかしやがて大屋一家の消息も知れ、小浪は本蔵の妻戸無瀬と共に上京する。その出立に際し、本蔵は小浪に向かって訓戒を述べている（「浪人しても大屋力弥。く倍氣^{ひん}ばしして去らるるな。」）。この、娘

への訓戒は何を意味するのか。戸無瀬小浪母子が上京する時点で、本蔵は塩谷家に対し、前述したような後ろめたさや後悔の念を抱いていた。また、これらの念から当然、小浪を息子の嫁にすることを由良之助が拒絶するかもしれぬとの危惧もあったはずである。そうでありながら、小浪の出立に際し改めて「貞女両夫にまみえず」「たとへ夫に別れてもまたの夫をまうけなよ」と諭す。あたかも力弥以外の婿は考えていないかの如くである。この場の本蔵からは、力弥を一途に想う娘以上に、小浪を力弥に縁づけたいとする意志が感じられる。本蔵が抱き留めたが故に塩谷は師直を討つこと叶わず、無念なまま死んでいった。その塩谷家の禄を食んでいた大屋家にとって、本蔵の娘を嫁にとることは出来ない。その出来ないことを敢て由良之助に承知してもらうために、必要とあれば自分の命も投げ出そうという意識を、本蔵は持つのである。それは、己の婦徳教育故に力弥一人を夫と思い詰めている娘に対する、父としての責任と愛情に端を発するものであろう。よって妻子の出立後、上京する時の本蔵は、「娘が難儀としらがのこの首。婿殿に。進ぜたさ」とある通り、娘の恋を成就させたいが為に死ぬことまで考えていたのである。つまり本蔵の死への意識は、上京前には本来、由良之助一党の仇討の意志の有無とは関係なく、娘の恋の成就を目的として芽生えたも

のであった。

ところが本蔵には一方で、先にみたような塩谷家への後ろめたさや後悔の念もあった。けれどもこれが死の動機として積極的な意味を持つことになるのは、本蔵が上京して由良之助の本心を確かめた後のことであろう。

そのように考える根拠としてあげられるのが、本蔵が上京後すぐにとった行動である。彼は妻子を上京させると、自分もそのあとから（妻子にも内緒で）わざわざ道を変えて上京し、彼女らより二日も前に京に到着した。それから四日間、由良之助の本心を探るといふ行動をとっているのである。これはつまり本蔵の上京には、由良之助の本心を知りたいという意図もあったということである。上京前の本蔵には、京で遊蕩している由良之助の真意が那邊にあるのか、今一つ把握出来ていなかったのではなからうか。彼は師直の屋敷の絵図をも上京前に用意していた。けれどもそれは、仇討の意志が由良之助になかった場合には、塩谷家への償いになるどころか、娘の恋の成就との引き換えにさえならぬ無用の物となる可能性を持つものであった。よって由良之助の真意が把握出来ていない上京前の段階では、絵図の用途は本蔵自身にさえ明確化されていなかったと考え得る。

勿論、本蔵が他ならぬ絵図を用意したということには意

味がある。のちに由良之助が、「徒党の人数はそろへども、敵地の案内知れざるゆゑ発足も延引せり」と言っているほど、絵図は討入にとって重要な役目を担うものであった。本蔵がその重要な絵図を用途不明瞭ながらも用意したのは、彼に内在する古武士的論理が、忠臣の鑑としての行動をしようとしているかもしれぬ由良之助の古武士的生き方への憧憬となつて、無自覚のうちに表出したのだと解せられよう。しかし、この古武士的生き方への憧憬は、上京前にはやはりまだあくまで無自覚なものであった。したがって、由良之助の真意不明な上京前の段階にあつては、本蔵のもつ古武士的論理によって自身に生じた後ろめたさや後悔の念も、古武士的な生き方への憧憬を具現化したもの、という意味を死に持たせるまでには至っていないのである。

以上のように考えてくると、上京前の本蔵は、以下の如く捉えることが出来る。

塩谷の刃傷事件を契機として、それまで封建官僚的論理に沿った生き方をしてきた本蔵の内部に、古武士的論理との間での相克が起こった。そのため、師直への贈賄行為・塩谷を抱き留めたという行為を、封建官僚的論理の立場から肯定する一方、古武士的論理の立場からは否定し、この矛盾が後ろめたさや後悔という感情になっている。また、上京の目的は、娘の恋を成就させることと、由良之助の真

意を探ることの二つであった。死への覚悟は、前者の、娘の恋を成就させるという目的を達成するための手段としてまず意識されたものである。そして後者の、由良之助の真意を探るという目的は、用途不明ながらも絵図を用意したことからも察せられるように、古武士の生き方への憧憬に由来している――。

上京前の本蔵の心情をこのように捉え、次へ進むこととする。

第二節 由良之助の本心を見抜く迄

この節では、上京してから由良之助の本心を見抜くまでの本蔵の心情を考察する。

上京した本蔵は、若い時に覚えた遊びごとの経験から、由良之助の遊蕩が表面上のもので、師直への復讐の念を内に秘めていることを見抜いた。見抜いたこの時、上京前から持っていた、娘の恋の成就という願いを由良之助に叶えてもらうには、己の死が必要であることが、本蔵にははっきりと認識された。上京前に芽生えた死の意識が、ここで明確に、娘の恋の成就を目的とする死の決意となったのである。そしてまた、由良之助の本心を見抜いて初めて本蔵は、由良之助らが為そうとしている忠臣の鑑としての行動に触発され、古武士の生き方への憧憬をも死という形で表現したいと思った。こうして、娘の恋の成就のために成そ

うとする死に、古武士的な生き方への憧憬の具現化としての死、という意味も加わったのである。しかし、亡君塩谷の恨みを晴らそうとする由良之助一党に比べ、本蔵は抱き留めたという理由で塩谷から恨みを受ける立場にあった。そこで、本蔵が自ら進んで由良之助らの手に掛かって死ぬことは、亡君の恨みを晴らすという由良之助らの行動に、本蔵も間接的に参加（但し殺される側として）出来るということでもあったのである。よって、古武士的な生き方への憧憬の具現化としての本蔵の死は、古武士的生き方への参加にも繋がるものであった。

そしてまた、由良之助の本心を見抜いたこの時、それまでは漠然としていた絵図の用途も明確になった。すなわち、本蔵の死の決意が娘の恋の成就と古武士的生き方への参加という二つを目的とするに及んで、絵図にもまた、娘の恋の成就の礼物という意と、古武士的生き方のめざすところのもの（師直を討つこと）を完成させる手助けとなる物という意の、二つの意味が与えられたのである。

第二章 九段目

前章では、二・三段目から九段目に至るまでの間の、いわば場面化されていない期間の本蔵の内的変化をみてきた。ではこれらを踏まえた上で、九段目での彼の言動を分析す

るとどういうことになるであろうか。

九段目に登場する本蔵は、時間の経過に沿い、順に次のような三態をなす。

(ア) 虚無僧

(イ) 敵役としての本蔵

(ウ) 立役としての本蔵

(ア) から(イ)への移行は「加古川本蔵が首進上申す。お受け取りなされよ」と虚無僧が名のることを契機とする。また(イ)から(ウ)への移行は、由良之助の「御計略の念願とどき。婿力弥が手に掛かつて。さぞ本望ほんまうでござらうの」という言葉を契機とする。

第一節 虚無僧から敵役へ

まず(イ)における本蔵の行動をみよう。そこでの彼は大屋一家を罵るなど、憎々しい悪役としての行動をとる。これは力弥の手に掛かることを意図してとった行動であり、その意図通りに事を運ぶためには、殺されても仕方のないような悪人にみえることが必要であった。この時の本蔵は、娘の恋の成就と古武士的生き方への参加という二つの願いを実現させるべく、死へ向かって行動しているのである。

ところが(ア)での彼は、それが本蔵その人であるということとさえ隠しており、第三者的な立場にある。前章でみたような内的変化を経て由良之助の居宅の戸外に至っているは

ずの本蔵が、(ア)のような、まるで事態を傍観するかの如き立場をとったのは何故なのであろうか。

本蔵の虚無僧姿は、由良之助の本心を探っていた間の本蔵の姿を寓意化したものと解せられよう。虚無僧は江戸時代、深編笠を被り、また全国を自由に往来できたところから、幕府に隠密の役を課せられたとも、隠密が虚無僧の姿をしていたともいわれる^③。虚無僧姿は、探索には好都合な姿だったのである。上京してからの本蔵が由良之助の本心を探る間ずっと虚無僧の形かたちをしていたと考えるか否かは兎も角、素姓を隠すための仮の姿が他ならぬ虚無僧と設定されているところに、作者の意図を感じることが出来る。もちろん本蔵自身の心情に沿ってみれば、上京してから九段目で虚無僧姿をして現われるまでの間に既に、由良之助の遊蕩ぶりから、その真意を見抜いていたと思われる。「若い折の遊藝が役に立つた四日のうち。こなたの所存を見抜いた本蔵」。したがって九段目に(ア)の姿で登場する本蔵は、由良之助の真意を見定めて既に死を決意している彼が、死ぬための行動を起こす(イ)の姿に移る)のに最も適当な機会を窺っているのだと解することが出来る。そしてそれは、本蔵が自分の死を有意義なものにするための機会を探すことでもあったのである。

本蔵が(ア)の姿をとって登場した時、由良之助の居宅内で

は本蔵の妻子が、力弥との祝言をお石に拒絶されたが故に今しも死のうとしているところであった。しかし、拒絶の理由としてこの時点でお石があげていたのは、本蔵が「金銀をもつてこびへつらふ。追従武士」(これは直接には若狭之助を指す言葉だが、間接的に本蔵をも指す)だということであつて、塩谷の本蔵への恨みについてはまだ言及していなかつた。娘の恋の成就と古武士の生き方への参加という二つの目的を持つ彼としては、ここで娘が死んでしまつては前者の目的を果たすことが出来ない。かといつて、妻子が死ぬのを止めて自分が死んだとしても、この時点ではまだ塩谷の本蔵への恨みについては持ち出されていないから、塩谷の恨みを晴らさせたことにはならない。娘にも依然として「追従武士」の娘というレッテルが貼られたままとなるから、本蔵の死は意味を成さない可能性があつた。故に彼はまだ虚無僧の姿を続けたのである。この場で本蔵が吹く「鶴の巢籠」は、親子の鶴の鳴き別れを模した曲といわれ、本蔵の妻戸無瀬が義理の娘小浪を手に掛け自分も死なねばならないという、母子の泣き別れとも言える状況と合致する。けれども、この曲はまた、死のうとする娘を傍観せざるを得ない状態にあつた本蔵が、その悲しみを表現したものであつた。

ところで、本蔵が(ア)の姿をしている間の、戸無瀬小浪母

子の応対をするお石は、由良之助ら古武士の生き方をする者たちの代弁者と見做すことが出来る。小浪と力弥の祝言に対してお石の最初の拒絶は、本蔵の贈賄行為を指して武士らしからぬ行為だと非難するものであつた。それは、お家の安泰を第一とする封建官僚的論理を、古武士的論理の立場に立ち非難したものである。これはつまり、古武士の生き方をする由良之助らの論理からみた非難であつた。お石自身としては、「後家になる嫁取つた。このやうなめでたい悲しい。事はないかういふ事が嫌さに。むごう辛ういうたのが。さぞ憎かつたでござんしよなう」と後で述べているように、本心から本蔵一家を疎んでいたのではない。だからこそ、古武士的論理の立場からは放つておいてもよかつた戸無瀬小浪母子を、死なせるわけにはいかぬと止めるのである。しかし、母子の死を止めはしても、お石の意志はあくまで母子に祝言を諦めさせることにある(それは、嫁にしてもすぐ後家になることに對する不憫さによる)。そこで、本蔵の妻子にとつては絶対に吞むことの出来ないような祝言の条件、即ち本蔵の首を所望したのである。ところがこの条件提示は、表面上、古武士的立場にある由良之助の妻(代弁者)として行なわれた。したがつてお石が、塩谷が抱き留められた恨みを口にし且つ本蔵の首を所望したことは、結局お石内部の思惑とは離れて、古武士的論理

が望む独立した意志として機能し、はからずも由良之助らが塩谷の恨みを忘れていないということを明確に示す形となった。由良之助一党が仇討をするつもりでいることが、このようにして本蔵の前に明示されたのである。それは本蔵が死への行動を起こす機会の到来でもあった。祝言の条件としてわが首が望まれた以上、首を差し出せば娘の恋を成就させるという願いは叶う。また、由良之助らの仇討の意志が明示された今、彼らにすすんで首を差し出すことは、亡君の恨みを晴らすという彼らの目的の達成へ一助を為したことにもなる。首を望まれたこの時こそ、本蔵が待ち望んでいた、二つの目的を叶えるための行動を起こす好機だったのである。

本心から本蔵の死を望んでいるわけではないお石に、本気で自分を憎いと思わせるために、本蔵は(イ)の姿をとった。しかも槍で突きかかってきたお石を膝に敷き伏せることで、力弥の怒りを煽り、意図した通り力弥の手に掛かるのである。付言すれば、(イ)の姿に移行する契機となる「加古川本蔵が首進上申す。お受け取りなされよ」という本蔵自身の言葉が、既にその後の彼の(イ)における行動の理由を示唆していたといえよう。

第二節 敵役から立役へ

このあと本蔵は本心を打ち明ける(ウ)の姿になる)ので

あるが、その移行の契機となるのは、由良之助の、本蔵の心底を見破る言葉であった。そこで(ウ)での本蔵をみる前に、由良之助について少し触れておこう。

本蔵が桃井家の家老であったのと同様、由良之助もまた塩谷家の家老であった。つまり塩谷の刃傷以下の事件が起こる前は、小藩大藩の違いがあるとはいえ、二人は等しく封建官僚の立場にあったのである。由良之助は九段目において、戸無瀬小浪母子や本蔵が登場する前から在宅していたから、隣室にでも控えていたことになるが、本蔵が力弥の手に掛かるまでは姿を現わさず、事の成行きをただ見過ごしていた。この時の由良之助は、本蔵の心底を見破ることから考えて、お石や力弥のように(イ)の見せかけの振舞に騙されずにいたことがわかる。また後に「君子はその罪を憎んでその人を憎まずといへば。縁は縁恨みは恨みと。格別の沙汰もあるべきにとさぞ恨みに思はれん」と語ったところから、本蔵が(イ)のような行動をとって力弥の手に掛からざるを得なかった心情をも既に把握していたと思われる。そのように本蔵の心情を由良之助が把握し得たのは、かつてはともに家老という同じ立場にあった(しかも主君もともに短慮な性格だった)ことから、由良之助が本蔵の心情を他の者よりずっと理解し易かったためだといえよう。塩谷の刃傷を「御短慮なる御しわざ」と評す由良之助にとっ

て、師直への贈賄とか塩谷を抱き留めるとかいった本蔵のかつての行動は、同じ状況に置かれたら封建官僚としてやはり自分も同様の行動をとったかもしれないという共感さえ含むものであった。けれども現在の由良之助は亡君の恨みを晴らすという古武士的立場にあり、本蔵の死への決意を看破していながらも、その決意が実行に移されないことには何の事態の解決も望めないということをもまた承知していたのである。そこで由良之助は、本蔵が自身の目論見通りに力弥の手に掛かるに任せたのであった。本蔵が手負いになるに及んでやっと由良之助が口を出すのは、以上のような理由に拠るものである。

本蔵にとってもまた槍に突かれたことにより、力弥の手に掛かるという計画が成功したので、もはや悪人を装う必要はない状態を迎えた。そこで由良之助が本蔵を見破る言葉をかけたことをきっかけに、本蔵を明かす。つまり(ウ)の姿になるのである。

ところで(ウ)において本蔵は、本心を延々と語るのだが、この長台詞が意味するものは何なのであるうか。そこには、本蔵役の語り手や演じ手の見せ場を作るための技巧上の工夫であるとか、また、物語の展開上山場を作るというようなストーリー構成の上での理由なども考えられようが、本蔵の心情から考察すると次のようにならう。すなわち、こ

の長台詞は、それまで目的成就のために本心とは異なる行動をとってきた本蔵が、表面上の仮の姿と内に秘めた真の姿との矛盾からくるアンバランスな状態を、矛盾のない状態へと戻すものであった。己のそれまでの行動の理由をここで周囲に明かすことにより、由良之助以外の人々にも、自分が死に至らざるを得なかった心情を理解してもらおうとした。彼の行動に対する周囲の納得が得られて初めて、彼は目的としてきた娘の恋の成就や古武士的生き方への参加について、何の支障もなく口にすることが出来たのである。娘の恋の成就については、「約束のとほりこの娘。力弥に添はせて下さらば未来永劫御恩は忘れぬ。コレ手を合はして頼み入る。忠義にならでは捨てぬ命。子ゆゑに捨つる親心」という言葉を発している。古武士的生き方への参加については、師直の屋敷内の様子に触れて討入の手筈に不備がないかを問うという形で口にしていく(「用心きびしき高師直。く毀たば音して用意せんかそれいかか」。また、この二つの台詞の間に婿引出として本蔵が提出した絵図には、娘の恋の成就と古武士的生き方への参加の両方の目的が込められていたことは、前述した通りである。

そして本蔵のこれらの目的は、実際に叶えられる。娘小浪の恋の成就は、由良之助の言葉「今宵一夜は嫁御寮へ。舅が情けの恋慕流し」によって確約された。古武士的生き

方への参加の願ひも、由良之助が「底意を明けて見せ申さん」と言い雪で作った五輪塔を見せることで仇討の覚悟を示したり、雪持竹の計略を教えたりして、本蔵をあたかも同志であるかの如く扱うようになっていふことから、叶えられたと見ることが出来る。

かくして本蔵はその目的（娘の恋の成就と古武士の生き方への参加）を達成した。しかし彼はその後でも由良之助と共に、塩谷の浅慮なることを嘆いている。本蔵は、塩谷の刃傷によって己の内に起こった二つの論理の相克に、死という形でしか決着をつけることが出来なかった。由良之助もまた、塩谷の「御短慮」に端を発する主家の断絶によって封建官僚としての立場を失った以上、古武士的生き方の立場に立った仇討をして死ぬしか、忠臣の証を立てることが出来ない。したがって彼らは、塩谷が封建社会の主君としての思慮を持って行動してくれたなら、お互いこのような悲劇的狀況に至ることはならなかったであろうという無念をかみ締めて嘆いているのである。そしてその嘆きはつまり、本蔵にしろ由良之助にしろ、彼らが死を賭けてまで目指すところのものが、結局は「浅きたくみの塩谷殿」の「御短慮なる御しわざ」の後始末でしかないという虚しさを示しており、その空虚な気持をこの場でお互いに吐露しているのだといえよう。そして最後に由良之助が「本蔵

殿の忍び姿をわが姿」として出立するにおよび、本蔵と由良之助の心情は姿の上でも一体化した。由良之助の吹く尺八の音は、あの世へ旅立とうとしている本蔵の追福であるのと同時に、由良之助自身の追善供養でもあったのである。

結

本蔵のとった過去の行動（師直へ賄賂を贈ったこと・塩谷を抱き留めたこと）は、ともに二つの論理——封建官僚的論理と古武士的論理——からみて、善悪どちらにも解釈可能な行動であった。したがって彼の過去の行動は必ずしも過ちであるとはいえないものである。よって娘に難儀がかかったことも、その大きな原因は塩谷の刃傷にあるのであって、本蔵の過去の行動は間接的な遠因でしかない。このようにみえてくると、本蔵が死なねばならなかったのは、自身に直接的な過ちがあったからではないことがわかる。

しかし本蔵は、上京前の、由良之助の真意がまだ把握できていない段階において、「こびへつらひしを身の科かにお暇いとまを願うて」とあるごとく、過去の贈賄行為を自ら過ちと断定し、更には封建官僚として生きることをも放擲してしまった。また由良之助の本心を見抜いてからは、己の死を一番有意義にすることが出来る機会を狙っている。これら

の本蔵の行動からは、彼が最期に由良之助と共にみせるような虚しさに対する嘆きといったものは、あまり感じられない。

本来ならば己の過失でないことに対して後始末をせねばならぬことからくる虚しさという感情を、本蔵は不可抗力的なものとして受け止める一方、一旦己の内部に起こってしまった二つの論理（封建官僚的論理と古武士的論理）の間の相克に対しては、受動的ではなくむしろ能動的に対処し、自らすすんで、死へ向かう行動を選びとっていったのだと思われる。

注

- (1) 『仮名手本忠臣蔵』（新潮古典文学集成『浄瑠璃集』所収、土田衛校注）。以下本文の抜粋はすべて同書より「」で示す。
- (2) 内山美樹子「『仮名手本忠臣蔵』論」（『浄瑠璃史の十八世紀』勉誠社）。
- (3) 角川『日本伝奇伝説大事典』に拠る。
- (4) 同右。

参考文献

・原道生「『実は』の作劇法（上）・（下）」（『文学』昭和

五十三年八・十号）

・原道生「場面化されぬドラマ」（『歌舞伎研究と批評』創刊号）

・内山美樹子「『菅原伝授手習鑑』などの合作者問題」（『浄瑠璃史の十八世紀』勉誠社）

・森修「作者たち」（『解釈と鑑賞』昭和四十二年十二月号）
他